

【論 文】

ショアーと子供の言葉¹

安 原 伸一朗

要旨

現代の文学がショアー以前の文学とは異なる意義をもっているとするならば、それは、強制絶滅収容所において、言語そのものが決定的な形で問いに付されてしまったからである。強制絶滅収容所とは、証言の可能性そのものを無化する試みだったのだ。それゆえ、ショアー後の文学は必然的に、どうしたら殺害されていった人びとの声を響かせられようかという、自分の存在理由の問い質しを内包することになる。こうした言語の問い直しは、迫害のさなかを生き抜いた子供たちの証言作品に端的に見られる。アハロン・アッペルフエルドやサユル・フリードレンダーをはじめとした当時の子供たちは、まさに死の恐怖のなかで幼年期を過ごし、言語を習得したのであり、彼ら彼女らの言語は、大人の世界に入るためというだけでなく、何よりも生き延びるため、そして証言するために獲得されたのである。したがって、ショアー以外の幼年期を知らないこうした子供たちの言葉は、戦前の文化を知る大人たちにとっては未聞のものとして存在しうる。言うなれば、彼ら彼女らの証言作品は、当初から、しかも永遠に、死の恐怖に裏打ちされた言葉から形作られているのである。

0. はじめに

第二次大戦期のナチスによるユダヤ人虐殺については、すでに夥しい量のインクが流されている。それは、歴史学の立場から行われる批判的検証に加えて、第二次大戦が現代文学における主要なテーマの一つになっているということでもある。

そうした作品には枚挙に暇がないが、なかでも、フランスでは社会現象にまでなったジョナサン・リテルの『慈しみの女神たち』が、まずもって挙げられるだろう。SSの視点から、近親相姦の話と絡める形でナチによる大虐殺が描かれることによって、確かに、薄皮一枚で辛うじて野蛮な暴力性から隔てられているにすぎない制度や文化に対して、主人公マクシミリアン・アウエがそうした薄皮一枚の偽善性を暴いている、という点は指摘できるのかもしれないが、この小説はそれでも、戦後の文学が——そしておそらくは文学のみが——引き受けることのできた務めを担っているようには見えない。この小説がきわめて詳細な調査に基づいて微に入り細に入る迫真の描写がなされているだけに、なおさら開き直っている感がある²。

それは、言葉を奪われた死者への敬意にほかならない。

この点から見れば、ローラン・ビネの『HHhH』は、きわめて興味深い物語である。わずか30代半ばにしてドイツの公安警察を手中に収めた「金髪の野獣」ラインハルト・ハイドリヒがプラハで暗殺された史実を、綿密な調査に基づいて、できる限り詳細に記述した物語である。むろん、リテルが、元ナチ将校を中心に据えているのに対して、ビネが、そのナチに絶望的な闘いを挑んだチェコ人の視点から描いているという相違はある。だが、それ以上に重要なのは、『HHhH』では、語りの構造がいささか複雑に設定されていることである。ビネは冒頭で、「架空の人物を登場させることほど俗っぽいことがあるだろうか？」³と記し、その本が「事実」——実在の人物、実際の出来事——を描くと宣言しているわけだが、注目したいのは、それと同時に、実在した人物を主人公とした物語を記すに際して、「僕はこの男を平凡な人物として描き、彼の行為を文学へと変換しようとしている」⁴とも述べ、自分がその本を書くことが「理想化」を不可避的にもたらしてしまう「錬金術」にほかならない、という自覚もまた表明されている点である。作者は、理解すべくもない他人の内面になんとか肉薄しようとするが、その作業に限界も感じ、「ハイドリヒが死んだということを知らされたとき、[彼らが]どんな反応を示したかについても僕は知らない。それがわかれば、僕のこの本のなかでもとりわけ強烈な印象を与える場面になったはずなのに」⁵などと、おのれの無力感を正直に吐露する。こうして、ビネによる物語は、書かれる過去の出来事と、書く現在の出来事との間を必然的に蛇行していくことになる。つまり、彼のこの物語は、事実に基づきながらも、きわめて内省的な作品でもあるのだ。そして、書くという行為に対する内省こそ、言葉をもたぬ死者への敬意に繋がらうのではないか。なぜなら、そうした内省は、ドラマティックで華々しい演出を固く禁じるからである。

とはいえ、とても禁欲的なビネの物語もまた、一つの完結した物語である以上、さらに一步、省察を進めることができたように思われるのだ。それはつまり、物語を構成する言語それ自体にかんする問い直しである。一見すると何一つ変化していないように思われる言葉そのものが、実のところ、収容所や虐殺という極限体験において否応なしに変質を被ってしまっているのではないか。そして戦後の文学は、言葉そのもののへの疑義から生まれてきたのではないか。このような、極限経験における言語の問い直しをめぐる問題設定が、本論のテーマとなる。

1. 「証言作品」というあり方

とはいえ、本論は、ショアーを絶対視ないし特権視する立場をとらない。ツヴェタン・トドロフが、「ユダヤ人殺害のような出来事が『唯一の特異性』によって性格づけられ、『過去や現在や未来のまったく別の出来事』と比較できないと本当に信じられるとすれば、ここかしこで行われているアマルガムは批判されてしかるべきかもしれない。[...] だが、もし出来事が唯一のものならば、それを別の機会を解く鍵として用いることはできなくなってしまう」⁶と述べているように、ショアーの絶対視は、容易に排他的ナショナリズム

へ転落する危険を孕むばかりか、他の災厄や悲劇の理解と分析の妨げになりかねないからである。

特権視しないということはしかし、ショアーの前代未聞の性格に目を閉ざすということの意味しない。ごく大雑把に言えば、ナチスは人類史上、大きな一歩を二つの方向に向かって踏み出してしまったと考えられる。一つは、優生学的視点からショアーの前に障害者を安楽死させていたこと（T4 作戦）に端的に示されているように、「生きるに値する命」を有するとされる人々が「生きるに値しない命」を決定し、一つの集団として社会から文字どおり機械的に抹殺していたという生政治的な一歩⁷。この点で、ナチスによる虐殺は、ソ連のグラグに対して、被害の甚大さという点では比肩しうるものだとしても、その性格を大きく異にしている。ソ連の場合、曲がりなりにも、階級闘争の終結による「人間の解放」という大義を掲げており、その意味では、啓蒙思想に連なる進歩史観に沿って、新たな人間の創造という合理的目的をもった、非合理的な矯正的収容所だった。これに対して、ナチス収容所の場合、手段は合理的だが、人類の一部を地上から文字どおり消滅させようとした点で、目的がきわめて非合理的なものだった⁸。ナチスの収容所は、「人類そのもの」、「人類の単一性」を問いに付すものだったのである。

そしてもう一つは、証言の可能性そのものを破壊しつくそうとしたという一歩である。ジャン＝フランソワ・リオタールが、1970年代以降の歴史否定主義の議論を前にして引き受けようとしたのが、まさに第二の点である。彼は、「抗争においては、何か文にされることを「求め」ており、今この瞬間に文にされえていないという不当な被害に苦しんでいる⁹と論じ、「係争／抗争」との間に区別を立てて、被害を訴える術そのものが失われている状態を「抗争」と呼び、裁判のように被害を訴えることのできる状態を「係争」と定義した。そして、ショアーの被害者たちは、迫害を証言する機会そのものを奪われている点で、抗争に置かれているという。

東浩紀は、「リオタールとボルタンスキーは固有名の記憶を扱う。それゆえそこで問われているのは（例えば）このハンス少年が失われたこと、そしてそれが反復不可能であることの悲劇だ。[...] 私たちが直面すべきは、むしろ、何故それがこのハンスでなかったのかという問いである。[...] ハンスが殺されたことが悲劇なのではない。むしろハンスでも誰でもよかったこと、つまりハンスが殺されなかったかも知れないことこそが悲劇なのだ¹⁰と述べ、リオタールのこの議論を「固有名の絶対化」として手厳しく退けているが、まさに「固有名」にこそ、文学の問いが潜んでいるのではなからうか。なぜなら、自分固有の経験を皆に共有される言語でもって語ろうとするときに不可避免的に生じる軋轢、越えられない断絶、理解してもらいたいという強い願望と理解されてなるものかという矜持との間の引き裂き、これらの地点から生まれてくる試みが、「文学」と呼ばれるのだと思われるからである。言い換えれば、個々人がそれぞれのやり方で行う言語そのものの問い直しを孕んでいる試みこそ、文学なのではないだろうか。

さらに言えば、一つの固有名が示されることで、その固有名が特権化されるどころか、逆に、そこには描かれぬ他の固有名が想起ないし想像される、ということも看過できない。リオタールの言う未だ文にされざる抗争の賭金を、了解可能な言語へともたらそうと

する試みが文学なのだとすれば、文学にはつねに、なおも文にされざるものが必然的に内包され続けることになる。文学はそれゆえ、ショアーについて、「600万人もの人が殺された」のではなく、「かけがえのない一人が殺されるという事態が600万回起こった」と捉える立場を選ぶことになる。すなわち、出来事や感情を描きながら、なお、その背後に沈黙するものを透かし見させてくれるもの、というわけである。

このように述べるのには、いくつかの理由がある。

まず、囚人だった生還者たちの証言作品に、しばしば、平板な理解に対する強い抵抗と呼ぶべき態度が見られることだ。これだけでも、すでに証言作品はきわめて両義的なものだと言える。なにしろ、自分固有の経験を読者に示す一方で、読者に対して自分の言葉をショアーの名の下に一括りにして理解したつもりになってはならないと注意を促している以上、言わばアクセルとブレーキを同時に踏んでいるようなものだからだ。15歳でアウシュヴィッツに送られたケルテース・イムレは、解放後にブダペストに戻った際、君はどんな酷い経験をしたのかと執拗に話しかけてくる大人を前にして、「ものごとには、それに関わりがない人や、そのことをよく知らない人や、子どもみたいに分別のない人とは、言い争ってもしかたがないこともあると、だんだんわかってきた」¹¹という冷ややかな感想を抱く。あるいは、10歳でテレージエンシュタットに収容された後、アウシュヴィッツに収容されたルート・クリューガーもまた、生還後、『『収容所』の一語でこうした施設について知るべきことがすべて説明がつくのならば、こんなに頭を使わずにすむ楽な話はない』¹²と痛烈に揶揄しており、さらに、14歳でアウシュヴィッツに収容されながら紙片に日々の事柄を書き留めていたアナ・ノヴァクのノートには、『『収容所にいたときくらい大いに笑ったことはない』と、もし私が何も知らない良識ある市民のみなさんに言ったりしたら、彼らがどんな顔をするかやらいまから目に浮かぶようだ』¹³との文言が見られる。迫害を生き延びるべく10歳の頃、両親によって兄と二人だけでフランスに亡命させられたユダヤ系ドイツ人で後にジョルジュ＝アルチュール・ゴルトシュミットとなる少年は、数々の危機をすり抜けた幼少期について、「それなのに数日来、まさにあの極度に危険だった時期ほど、山地が広々として明晰で、未来をいっぱい孕んでいたことはなかった」¹⁴と記し、自身の置かれた極限的な状況よりも、それと甚だしい対照をなすのどかな風景の方に注意を促している。このように、収容所は身体的な苦痛と精神的な恐怖の極点だったはずだという安直な理解を峻拒する言葉は、証言作品に頻繁に読まれるのである。

個々の固有名を尊重しないような包括的で概略的で平板な理解に対するこのような拒絶は、さらに、たとえば世界的な『アンネの日記』が図らずも覆い隠してしまうものに目を向けさせてくれる。すなわち、『アンネの日記』が一つのアリバイのようになってしまい、アンネたちを匿ったオランダ人という姿にのみ光が当てられ、オランダ人のナチ党員の存在や、各地のゲットーに設けられたユダヤ人警察の役割などが見えにくくなってしまふ懸念がつねに生じるわけである¹⁵。結果としてナチによるユダヤ支配に手を貸すことになってしまったユダヤ評議会をはじめとして、ユダヤ人がけっして一塊の集団を成していたわけではないこと——ナチ協力者や密告者もいたこと——については、ナチ体制下でユダヤ人や障害者を匿った盲人作業所を描いたインゲ・ドイチュクロン（彼女もこの作業所に

救われた)の『パパ・ヴァイト』¹⁶をはじめとして、種々の証言作品に描かれており、幼少期をオランダで過ごし、14歳で検挙されたユダヤ系アメリカ人バリー・スパンヤードは、「毎週1500人、2000人、3000人とドイツ軍がユダヤ人を狩り集める計画をたてるのが、ドイツ系ユダヤ人のたちの仕事だった」¹⁷と記している。

また、こうした事態の多面性の捨象以上に危険なのは、『アンネの日記』によって、第二次大戦時のヨーロッパで迫害されたり、強制収容されたりした子供については、すでに了解済みであるかのような雰囲気醸成されてしまいかねない点である。実際、9歳の頃に「ヴェルディヴ事件」で検挙された少女アネット・ミュレールは、「子供たちには記憶がない……」だとか「子供たちは別に苦しまなかった……」などと耳にしてきたことを後年告白し¹⁸、6歳の頃にボルドーで検挙されながら脱出を果たしたボリス・シリユルニクは、「私の悲惨な子ども時代は、例外的な出来事だったのだ。戦争中に話したのなら、私は殺されていただろう。ところが平和な時代に話したら、今度は信じてもらえなかったのだ」¹⁹と記している。そして、両親を失い、10歳で収容所を逃げ出し、ウクライナの森に潜伏して生き延びたアハロン・アッペルフエルドは、「疑う余地のない邪悪な所業を通じて、殺戮者たちは、ユダヤ人たちを匿名へ、番号へ、顔をもたぬ生き物へと還元した。[…]芸術の名に値するすべての芸術が飽くことなく教えてくれるのは、この世界が個人に依拠しているということだ」²⁰と述べて、それぞれの証言作品に見られる、個人の視点を保つことと個人への注意を喚起することが、それだけですでに、人びとを匿名の集団として虐殺せしめたナチスの振る舞いに対する抵抗になりうるのだ、と主張している。

このように、証言作品に読まれる、平板化に対する抵抗と無理解に対する恐怖といった読者を戸惑わせずにはいない両面性、そして、個別のかつ多面的な視点を鑑みれば、600万人の死者をもたらしした災厄という括り方と同様に、夥しい数の証言作品を一括りにすることもまた、いささか乱暴な所作であることが理解される。

ところで、本論ではこれまで、性急に「証言作品」という表現を繰り返してきたが、それについて、クロード・ムシャールは次のように定義している。

証言作品は、形作られるその端から、こうした[殺戮という]解体を基盤として再構築しようという活動——どれほど絶望的なものでありえたとしても——だった。私たちは証言作品を読み、それに耳を傾けることで、しかとそのことを感じ取る。証言作品は、何らかの注視、何らかの聴取を内包している——つまりところ注意を。証言作品にかんする私たちの読解や議論は、その不完全な実現でしかない。[…]証言作品は、破壊への意志の痕跡をおのれのうちに宿している。²¹

つまり、証言作品とは、それに向き合う私たちにつねに問いかけてくる作品であり証言だ、というのである。すなわち、ここに描かれた極限経験を何一つ知らないお前は、過去の「今、ここ」ではなくおのれの生きる「今、ここ」で、証言作品にかかわる読者となって、関係を探っていく覚悟があるのか、と。

そして、たとえ部分的であろうと読解し、受容して、関係を築くことを可能にする呼び

かけ、あるいは投瓶通信としての証言作品というこの姿勢は、証言作品を前にして読者が感じるある種の居心地の悪さを説明してくれる。この居心地の悪さとは、お前はいったい何の権利があって災厄に関心を抱くのか、その興味には怖いもの見たさやポルノグラフィへの関心に似たものはないのか、といった類の自問を抑えることができない、ということだ²²。とはいうものの、証言作品が、理想的な読者による完全なる理解——そもそも、そのような理解、「すべては了解済みだ」などと断言できる可能性ははたして存在するのだろうか——ではなく、読者との関係をまずもって求めているものだとするならば、その居心地の悪さもまた一つの関係だと見なすことはできるだろう。

2. 子供の眼差しと言葉

そのうえで、本論であらためて問うてみたいのは、ショアーが「文学」の問い直しを迫るだけではなく、「言葉」の問い直しも迫るものだった、という点である²³。

言葉の問い直しとは、いったいどのような事態なのか。この問いを前にして、今回取り上げたいのは、自分の意思で戦争状態を生み出したわけでも自発的に抵抗する術も持っていたわけでもなく、いつかは戦争が終わるはずだと思いつくこともままならなかった、当時、子供だった人びとの言葉である。それは、一つの仮説を検証したいがためにほかならない。

レジスタンスとして収容所に送られたフランス人ロベール・アンテルムは、収容所解放後に、友人のディオニュス・マスコロに救出されるが、その直後、マスコロに宛てて手紙を書いている。そこには、次のような驚くべき文言が記されている。

自分のベッドに横たわって、とくに君やマルグリットに話した最初の数日は、僕はこの世の人間ではなかったんだ。[…]

ほとんど形を成さず、ともかく古びず時代を経ないような、僕の息遣いにのみ合わせて象られることばを解き放つことができたこと、分かるかい、この幸福によって、僕は心底傷つけられたし、そのとき僕は、病氣——チフスや熱といった——による死からかくも遠ざかっていると思っていたのだよ。僕は、自分がこの幸福によってのみ死ぬんだと思ったのだ。²⁴

ここに見られる言葉の問い直しと、子供の言語の問いは切り離せないのではないか、というのが本論での仮説である。

アンテルムは、検挙されたとき、27歳の大人だった。それゆえ、たとえ彼が収容所からの生還後に、戦前の自分から切り離された人間として新たに生まれ直すことができたにしても、彼にとって、収容所の日々は、それまで慣れ親しんだ日常とは切り離された特殊な環境だったわけである。

ところが、幼少期にショアーに遭遇した子供たちにとって、取り戻すべき以前の生活や帰るべき元の世界はほとんど存在しない。物心ついた頃には迫害の炎に囲まれているか、

もしくは、おのれの出自や以前の生活を完全に消し去り、子供ながらに別人として生きることを余儀なくされたからである。チェコからフランスに逃れたものの、両親はフランス警察によって東方へ移送された末に虐殺され、自身はカトリック施設で生き延びたユダヤ系チェコ人だったパヴェル・フリードレンダーは、自分の名を捨て去り、典型的なフランス名をもつポール＝アンリ・フェルラン少年となった（そして戦後、彼はサユル・フリードレンダーとなる）。これは、アイデンティティを根本的に喪失する経験にほかならない。「自分の人生の最初の10年間、そして幼少期の思い出は消え去らねばならなかった。というのも、かつての私の姿と、私がならねばならない姿との間には、統合などありえなかったからである」²⁵。このように、彼ら彼女らには、たとえ戦前の幼年期の生活があったにせよ、それは、気がついた時にはつねにすでに懐かしむことを禁じられた事柄、忘却すべき事柄として封印されざるをえない。

あるいは、9歳でテレージエンシュタットに収容され、翌年にビルケナウに送られたオト・ドフ・クルカは、「生き延びた大人の収容者がみな経験し、大方は衝撃を受け、あつというまに打ちのめされていた、その軋轢は、私にとって存在しなかった。なぜならそれが初めて知る世界であり、秩序であったからだ」²⁶と痛烈に述べている。他方、クリューガーは、プリーモ・レーヴィをめぐって、「レーヴィは成人し完成したヨーロッパ人の自己意識をたずさえてアウシュヴィッツに来ていた。合理主義精神をもち、イタリア人として故郷があり、地に足をつけていた。子どもはこうはいかない」²⁷と述べる。そして、アッペルフェルドは、「子供には通時的時間や過去と比較するという感覚がない。大人たちがかつて存在した事柄について語るのに対して、子供たちにとってショアーは現在そのものであって、幼年期であり、青春時代だったのだ。その子供たちは、それ以外の幼年期など考えられないのである」²⁸と断じている。だからこそ、15歳でアウシュヴィッツに送られたケルテースが、アウシュヴィッツに移送されて最初に感じたのは、「その短い道のりで周囲に見たものは、すべてが気に入った。道のすぐ右手にある大きな草原のサッカー場は特に僕には嬉しかった」²⁹と記されるごとく、サッカー場に対する無邪気な喜びだったのであり、フリードレンダーが、まさに生死を分ける局面のなかで記憶に留めているのは、ほとんど縁がないにもかかわらず検挙の危険を承知で自分を養護施設に送ってくれた公立学校の校長ドゥローム氏の「つやつやした黒髪が丸い頭からずれてしまい、鬢を被っていたことがばれてしまったこと」なのだ³⁰。彼ら彼女らは、現在時としての災厄を生きたのである。

こうして、子供は、自分の周囲の環境のなかでのみ生き、世界を超越的視点から眺めて統合し分析する術を未だ手にしていないがゆえに、迫害下の世界を自分自身の所与の世界として認識し、あらゆる出来事を、同等の重要性や同一の強度をもっているものとして叙述する。いろいろな事の重大さに軽重を付けられない子供たちは、それゆえ、大人が不安に駆られている状況のなかで、楽しく遊ぶことさえできる。子供の生還者たちを調査したドイチュクロンは、ビルケナウの家族収容所³¹にかんする報告書に基づいて、「[小さい子供たちは]『囚人班長と囚人寮長』遊び、『非常点呼』遊び、『帽子脱げ』遊び、などをやり、[...] あるときなど、『ガス室ごっこ』さえしました」など³²、ゲッターや収容所内

で遊びを作り出していた子供たちの話をいくつも報告している。大人たちがショアーをそれまでの生活の切断として生きたのに対して、子供たちは、言うなれば、ショアーの世界に生まれてきたのであり、ショアーとそれ以外の世界とを比較できないからこそ、ショアーのもっとも身近に存在していたとも言えるのだ。

子供たちからすれば他愛のないこのような遊戯と、彼ら彼女らの置かれている境遇——戦前の生活を知っている周囲の大人たちには耐えられない環境——とのギャップを前にして、ショアーを直接知ることのない読者は戸惑わざるをえない。それはもちろん、どのような状況下でも遊んでしまう子供たちの無邪気さと、その子供たちを待ち受け、今日の私たちがある程度は知っている運命とのコントラストがきわめて大きいからだ。しかしながら、彼ら彼女らの無邪気さが衝撃的なのは、それが大人の世界に対する異議提起にもなっているからでもある。

生まれてから最初に発見する世界がショアーの始まろうとしている世界だった子供たちにとって、大人からすれば悲惨なものや凋落したものと見える状況は、自分の世界そのものとして立ち現われてくる。それゆえに、後年、大人になってから自分の幼少期のことが示される当時の子供たちの証言作品は、自分たちの遊びや日常を描いているというそれだけでもすでに、当時の大人たちが築き上げてきた世界、すなわち収容所を生み出してしまった世界に対する批判の力をもつ。だから、当の子供たちからすれば、致命的な状況下をそうと知らぬままに生きてきた恐怖は、あくまでも事後的に強く感じられることになる。ナチ占領下のフランスを生き延びたユダヤ系フランス人のピエール・パシェは、「戦争とそれに続く混乱がひとたび実際に落ち着くと、私は、戦時下で襲われていたはずの崩壊を事後的に感じ始めた」と記す³³。生き延びることに専念せざるをえない状況下では感知されなかった恐怖が、戦後になって初めて自分に憑りつき、それ以降は鎮められなくなっているというのだ。

大人に対するそうした衝撃はしかし、彼ら彼女らの証言作品に読まれる内容のみに由来するのではない。その子供たちの言語そのものの力にも由来しているのだ。収容所文学や虐殺について精力的に研究を進めているカトリーヌ・コキオは、ショアーの子供たちの証言作品をめぐって、次のように分析している。

子供は言語に住み着いている。そして子供が死の風景のなかを通るときには、この原初的な力こそ、自分の過ごすその場所で、子供に生をつくらせるのだ。[...] 災厄のなかで大人以上に寄り添なき者である子供は、大人とは別の深度で言語を取り戻す。それはつまり、詩的活力が湧き出て、「数々の形式」が生まれる「始まり」の深度である。³⁴

大人は、収容所の後には、以前の生活を取り戻すようにして以前の言葉をそのまま「取り戻す」そうとするのに対して、子供たちは、物心ついて最初に知る世界が迫害下の生活であるがゆえに、生きるために、そして生き延びるために余儀なくされた沈黙の後に取り戻すべき言葉は、当初から存在していないか、存在していないことにされる——なぜなら、

ドイツ語を母語とするゴルトシュミットがフランス語をいち早く身につけねばならなかったように、アイデンティティを偽るために、彼ら彼女らはしばしば両親のものではない言語を習得したのだから。それは言うなれば、あらためてかつ初めて、学び始めねばならない。その言語は、成長して生きていくためばかりか、何よりもまず、出自を隠し、短いながらもそれまでのおのれの過去を抹消し、別人として生き残るために、まるで新たな母語であるかのようにして、学ばれるのである。それゆえにパシェは、「戦争が終結し、私たちの状況が少し落ち着いたとき、私は実際のところ自分の名も、姓も知らなかった。というのも、私たちは名を変えていたからで、私は新たな名——本物の名——を、あたかも即興で作り出されたものであるかのように覚えねばならなかったのだ」³⁵と振り返るのである。1937年生まれのは、戦時下ではなく、戦後になって、自分の本当の名や住所をまるで初めて見るかのように学習し直し、ひいては、アイデンティティを築き直す必要に迫られたわけである。

他方、アップルフェルドは戦後、イタリアを經由してイスラエルに移住するが、そこで、ヘブライ語を文字どおり学び始める。彼はその経験をめぐって、「昔の言語は私たちにとって新しいものだったし、はっきりと忘れ去ることさえ伴って吸収された。私たちは古い衣類を脱ぎ捨てるように、自分のうちに残っていたいくつかの言葉をためらうことなく禁じたのだ」³⁶と、言語を住み替える経験を記したうえで、次のようにも述べている。

私はわざわざ戦争直後のことに言及している。というのも、そのとき、表現しようという最初の試みが芽生えたからだ。当初はうまく発せられなかったけれど。沈黙を守りたいという思いと、話したいという思いは、いっそう深いものになった。[…] 芸術的な表現のみが、この二つの複雑な喫緊の要請の間を橋渡ししようとしたことになるのだろう。[…]

新たな「形式」——もしそれをそのように呼べるとすれば——は、子供たちによって発見されたのだ。³⁷

つまり、アップルフェルドによれば、ショアーの猛威の下で幼少期を過ごした子供たちが、あらためて、そしてあたかも初めてであるかのようにして言語を獲得するのは、生き延びるためであると同時に、証言するためでもある、というのだ。しかも、その証言作品は、伝達と沈黙という相反する要請に突き動かされ、了解可能な既知のものでありながら同時に未聞のものでもある言語——子供にとって取り戻すべき戦前の言葉は存在しないのだから——に基づいているがゆえに、それまでの文学や芸術、文化を、根本的に問い直し、根底から揺るがすような、「新たな」存在なのである。それゆえ、彼ら彼女らの言葉と同じような矛盾や要請を引き受ける大人の言葉以上に、子供たちの言葉は創出的であり個別的なのだ。

さらに、この点から見て興味深いのは、すでにショアーを専門とする歴史家として活動していたフリードレンダーが、大戦期に迫害され出自を偽って生き延び、両親を殺害された自身の過去を語る一つの大きなきっかけとなったのが、まさに、言語コミュニケーション

ンの困難な障害をもつ子供たちとの出会いだったことである。「自分自身の過去への道筋を再び見出すには、かなり長い時間が必要だった。諸々の出来事そのものの記憶を追い払うことはできなかつたし、それらについて話したり、ましてやペンを手に記述したりしようとする、私はある奇妙な麻痺に襲われるのだった」³⁸と云う彼は、戦後、フランスからイスラエルに移住するが、戦後10年を過ぎた頃、叔父の住むスウェーデンを訪れる。そこで、「スヴァラ・プレ」と意味不明の言葉だけを繰り返して自分の世界に閉じこもる少年をはじめとして、障害をもった何人かの子供たちに出会うのだが、自分ではどうしても意思の疎通の図れなかつたその出会いは、しかし、彼にとって「最初はよく分らぬまま、そして明らかに、自分を疼かせる象徴になったのであり、個人的には、紛うかたなき誘因になった」³⁹という。まさしく、言語による意思疎通の不可能な事態に直面したとき、すなわち、言語の力そのものを疑い、問い直すことを迫られたときに、フリードレンダーは、封印してきたおのれの過去を言語によって認識し直し、たとえ十全な形では不可能であろうともともかく他者への伝達を試みようとして決意するのだった。

このように、当時子供たちだった人の証言作品を構成する言語そのものには、あらためてかつ初めて学ばれた言語、そして理解可能性と理解の拒絶という矛盾が、当初から、大人の言葉におけるよりも決定的な形で、孕まれているのである。

ところで、コキオは、「子供という異邦人が向ける[災厄という]この現実に対する眼差しは、人間的なるものの終焉を理解させはしないにしても、少なくとも、非人間的なるものをなじみ深いものにすることができる。文学を超え出て、不可避的に文学を刷新するも未聞の力なのだ」⁴⁰と補足している。つまり、当時の大人たちが不可避的に収容所以前の言葉で収容所経験を表現しようとせざるをえないのに対して、否応なしに収容所や迫害の経験を出発点とする当時の子供たち——少なくともその一部の人びと——は、自らの経験を語るのに、初めて手に入れるかのような言語を用いるというのである。だからこそ、当時の子供たちの言葉は、自分の極限体験が自身のなかで以前の生活という比較対象をもたないのと同じように、その経験をできる限り裸形で描くことができるわけである。

ここで参照されているのは、ジョルジョ・アガンベンの『幼年期と歴史』である。彼は、これまでの西洋哲学が「言語活動そのものの経験」を無意識に前提してきたことを指摘したうえで——アリストテレスからハイデガーまで、「なぜ存在が存在するのか」と問われてきたにせよ、「なぜそのように問うことが言語によって可能になるのか」とは問われてこなかった——、言語活動が存在するという事態の経験がどのようにして可能なのかと問う。これに答えるべく、彼は、エミール・バンヴェニストに依拠しながら、「人間的なもの」と「言語的なもの」との水準に差異が存在していると論じる。子供は、ラング（すなわち記号論的なもの、記号の体系）とパロール（意味論的なもの、つまりラングの現働化）との差異の経験を経て、現実世界に対する解釈格子としてのラングを実際に用いて、自らを主体＝主語とすることで、言語運用の意味論的な空間へと生まれ出て、言葉と人称をもった人間となる、というわけだ。しかし、言葉をもたぬ原初的人間としてのインファンスは、何ら心理的なものでも実体的なものでもなく、言語が習得された後になって事後的に見出されるものである。だからそれは、つねにすでに人間の言語活動を裏打ちしている。

人間のインファンティア〔言語活動をもたない状態〕として、経験は人間的なものと言語的なものとあいだのたんなる差異であるにすぎない。人間はつねにすでに語る存在ではないということ、人間は言語活動をもたない存在であったし、いまもなおそうであるということ、これが経験ということなのだ。〔…〕じっさいにも、インファンティアはなによりも言語活動に作用をおよぼして、それを構成し、それを本質的なしかたで条件づける。⁴¹

すなわち、言語を未だもたないインファンティアという在り方こそ、言語を可能にしているのである。そして経験は、人間がまだ人称をもたぬ人間そのものであることと、人間が言葉を持ち、つまりは主体としての人称（主語）をもった存在であることとの中間地帯にある。換言すれば、人間にとって、経験は、もっぱら言語の水準に存するわけではなく、また、言語以前の水準や言語の彼方に位置するのでもなく、言語と言語以前との間に——先述のリオタールの表現を借りれば「文にされることを求めている」領域に、ともいえよう——存在するのだ。というのも、人間は、何を経験するにせよ、言語以外の手段でそれを捉えることができないからである。

だとすれば、通常の言語活動では忘れ去られている——言語が存在するという根本的な謎にその都度立ち止まっていたは日常生活など営めまい——このラングとパロールとの差異に、絶えず注意を向け、かつ注意を向けさせるのが、言語を学びつつある子供の言葉なのではないか。それは、明確に区切られておらず、息も切れ切れで、喚き声や笑い声と入り交じり、何を意味するのかははっきりとは分からないにもかかわらず、過つことなく「人間の声」として認知される。あるいは、大人を当惑させ、驚かせ、感心させ、嘆かせ、大人たちに衝撃を与える。理解されないかもしれないが、それでも、私たち大人に届いてくる言葉。そればかりか、すでに身体とは不可分な形で言語を獲得している大人である私たちに、耳の傾け方の変容を迫ってくる言葉。子供が口から発する音は、周囲の大人たちによってほぼ間違いなく人間の声として認識される⁴²。

そして、それはまさに、アンテルムが解放直後に語った「窒息した言葉」,[「自分の息遣いにのみ合わせて象られることば」と重なり合う。アンテルムがこうした言語の(再)獲得ができたのは、ほかならぬ彼自身が、収容所で「子供」になったからなのだ。実際、彼は、収容所の生活について、「ここでは、死と生は通じており、どの瞬間でもそうだった。火葬場の煙突は料理場の煙突の横で煙を出していた。〔…〕死は見事なまでに日常生活の回路に組み込まれていた。／私たちは子供だったのだ、本当に」⁴³と記していた。収容所で彼はすべてをひとしなみに眺める子供と化した。それゆえに彼は、先述の帰還直後に書かれたマスコロ宛の書簡において、「だから、一人の人間が形作られるのを見たければ、そうした形成の病的な側面を考慮に入れつつ、僕を間近で観察すればいいのだよ」⁴⁴と述べることができたのである。それは、この世界のなかへの身体的な再誕生というだけではなく、言語的な再誕生でもあり、さらに言えば、この二つが切り離せないことをアンテルムは認識していたのである。

この点から見れば、たとえば、1940年代以降のモーリス・ブランショが、主にカフカ

を読みつつ、「書くとは、終わりにえないものに身を委ねることであり、その本質を担うことを引き受ける作家は、「私」と述べる力を失う」⁴⁵などと記して、「私 (je)」から「彼 (il)」への移行にこそ文学空間が宿っていると述べていることなどは、当時の大人が、どうにかして子供たちの言語、あらためてかつ初めての言語、生き残るためと同時に証言するためという未聞の言語に近づこうとする試みを、誰もが人称を剥奪される非人称の領域たる文学空間として捉える姿勢だった、とも理解できるだろう。

3. 締めくくりに

では、収容所で生まれた子供については、事態はどのようなものなのだろうか。迫害の前に生まれ、物心ついた頃に収容されたり亡命を余儀なくされたりした子供は、言語をあらためてかつ初めて獲得することによって、戦後世界を生きることができた。そしてそれは、これまで見てきたように、戦後の文学のみならず、戦後の文学言語の枠組みそのものを変質させ、つねにすでに沈黙に裏打ちされている一つの文学空間を切り拓く可能性を有するものだと考えられた。それに対して、収容所の只中に生まれ出た子供はどのような世界を生きたのか。

レーヴィは、収容所から解放された直後の日々を『休戦』という物語に著しているが、そこには、アウシュヴィッツで誕生したと思いき「フルビネク」と呼ばれる子供の姿が描かれている。

フルビネクは虚無であり、死の子供、アウシュヴィッツの子供だった。外見は3歳くらいだったが、誰も彼のことは知らず、彼はといえば、口がきけず、名前もなかった。[...] 誰も教えてくれなかったので話すことができない言葉、その言葉への渴望が、爆発しそうな切実さで目のなかにあふれていた。

[...]

だが[ハンガリー人の]ヘネクは小さなスフィンクス[フルビネクのこと]の脇に、物静かに、頑固に座り続けた。彼が発する悲しい力をヘネクは感じなかった。食べ物を運び、毛布を直し、いやな顔一つせずに、手際よく体をきれいにした。そしてもちろんハンガリー語で、ゆっくりと、辛抱強く語りかけた。一週間後、ヘネクはうぬぼれをひとかけらも見せずに、重々しく告げた。フルビネクが「言葉を一言しゃべった」と。[...]

[...] 私たちの間には、ヨーロッパのあらゆる言葉をしゃべる代表がそろっていたのだが、フルビネクという言葉は分からなかった。[...]

フルビネクは3歳で、おそらくアウシュヴィッツで生まれ、木を見たことがなかった。彼は息を引き取るまで、人間の世界への入場を果たそうと、大人のように戦った。[...] フルビネクは1945年3月初旬に死んだ。彼は解放されたが、救済はされなかった。彼に関しては何も残っていない。彼の存在を証言するのは私のこの文章だけである。⁴⁶

ここに描かれているのはいったい何か。それは、フルビネク自身のまさに裸形の経験であり、彼が言語をもたぬ以上、経験そのものである。と同時に、すでに言語を獲得した周囲の人びとが、どうにかして、彼の「虚無」としての存在や経験、および「木」さえ存在しない彼の世界を、自分たちのもつ解釈格子たる言語の枠組みで理解し、意味づけ、捉えようと努める姿にほかならない。物言わぬ子供に対して、何かを訴えているというメッセージをその目に読み取り、コミュニケーション可能な言語をもった大人の世界に入ろうとしていたと解釈するのは、あくまで周囲の大人たちであり、フルビネクがはたしてそう考えていたのか、そもそも、考えるということができたのかどうかは、もちろん定かではない。しかも、レーヴィがこのように記述し、読者がそれを読むことで、フルビネクが「救済」されるわけでもない。だがそれでも、誰かがこの出来事を言語の水準に置き直すことがなければ、この人間の世界で、フルビネクの存在を証明するものは何一つ残らないのである。言語を獲得する術や条件を奪われた子供については、つねにすでに言語をもった大人がその裸形の経験を既存の言葉で証言するよりほかない。だが他方で、その証言は、すでに確立された大人の言語を揺るがさずにはいない。叙述されたフルビネク自身が、私たちにはどこまでも謎として留まるからである。

子供がまず人間的次元にのみ存在するのに対して、言語をもたずには考えることはおろか感じることもできない大人は、つねにすでに人間的次元と言語的次元とが切り離せない状態に置かれている。人間の経験は、人間的次元と言語的次元の間で起こり、もっぱら言語的次元で伝えられ、表現され、つまりは意味づけされる。子供はそれゆえ、より生の状態で経験を経ることになるのだが、それを自分で理解して他者に伝えるには、他者にも了解可能な形で表現する術、すなわち言語をあらためてかつ初めて手に入れていかなければならない。もしそれがかなわない場合、そこには、フルビネクのように、意味の不明な言葉、すなわち「声」だけが残ることになる。

フルビネクのこの言葉ならぬ声、意味の定かでないこの叫びを、どうにかして響かせ続けようともがいているのが、戦後の文学、少なくとも、制度としてではない広義での文学の営みではないか。さらに言えば、裸形の経験を前にして、つねにすでに言語という解釈格子が自分から引き離せない形で習得されている大人に対して、自分の耳の傾け方を変えることを執拗に求めてくるのが、とりわけ証言作品に書き留められている「声」なのではないだろうか。

(本論は、JSPS 科研費 課題番号 26370369 の助成を受けたものである)

¹ 本論は、「フランス現代文学における第二次大戦の記憶——公開研究会」(科研費基盤 B「現代フランス小説——第二次大戦および戦後の記憶の再編成の視座から」と科研費基盤 C「子供から眺めた第二次大戦期フランスのユダヤ人迫害の検討」主催、2015年11月28日、東京工業大学)での発表「ショアーと文学——子供たちの言葉」を基にしている。なお、本論では、後述するように、ショアーのもつ未聞の性格ゆえに、一般的な虐殺を意味するジェノサイドという言葉ではなく、ショアーという言葉

葉を用いている。

- ² とはいえ、種々の資料に基づいて真に迫る「自伝」として捏造されたビンヤミン・ヴィルコムルスキーの『断片』の試みに比べれば、『慈しみの女神たち』は、小説 (roman) を謳っている点で擁護するだろう。
- ³ ローラン・ビネ『HHhH』高橋啓訳、東京創元社、2014年、7ページ
- ⁴ 同書、8ページ
- ⁵ 同書、343ページ
- ⁶ Tzvetan Todorov, *Les abus de la mémoire*, Arléa, 2004, pp.37-38
- ⁷ Cf. カール・ビンディング、アルフレート・ホッヘ『生きるに値しない命を終わらせる行為の解禁』（森下直貴・佐野誠編訳『「生きるに値しない命」とは誰のことか』窓社、2001年所収）。なお今日では、生政治的な枠組みのなかで、胎児条項のある国において殺しても罪にならない存在（ホモ・サケル）になっているのは、先天的に治癒不可能な障害をもち、親が墮胎を求め、死産児として処理される新生児である（山本由美子『死産児になる』生活書院、2015年を参照）。
- ⁸ Cf. Enzo Traverso, *Le totalitarisme*, Seuil, coll. Points, 2001, pp.96-97
- ⁹ ジャン＝フランソワ・リオタール『文の抗争』陸井四郎ほか訳、法政大学出版局、1989年、31ページ
- ¹⁰ 東浩紀『存在論的、郵便的』新潮社、1998年、60-61ページ。強調は原文。
- ¹¹ ケルテース・イムレ『運命でなく』岩崎悦子訳、国書刊行会、2003年、260ページ
- ¹² ルート・クリューガー『生きつづける』鈴木仁子訳、みすず書房、1997年、97ページ
- ¹³ アナ・ノヴァク『14歳のアウシュヴィッツ』山本浩司訳、白水社、2011年、199-200ページ
- ¹⁴ ジョルジュ＝アルチュール・ゴルトシュミット『隔離の風景』富重与志生訳、同学社、1999年、139ページ
- ¹⁵ 一例として、ジャック・プレセルの作品には、ユダヤ人でありながらナチに協力する「ユダヤSS」の姿が描かれている（Jacques Presser, *La nuit des Girondins*, trad. du néerlandais par S. Margueron, Maurice Nadeau, 1990）。また、ユダヤ評議会については、ハナ・アーレント『イェルサレムのアイヒマン』（大久保和郎訳、みすず書房、1969年）を参照。
- ¹⁶ インゲ・ドイチュクローン『パパ・ヴァイト』藤村美織訳、汐文社、2015年
- ¹⁷ バリー・スパンヤード『地獄を見た少年』大浦暁生ほか訳、岩波同時代ライブラリー、1994年、125ページ
- ¹⁸ Annette Muller, *La petite fille du Vel d'Hiv*, Livre de poche, 2012, p.5
- ¹⁹ ボリス・シリユルニク『憎むのでも、許すのでもなく』林昌宏訳、吉田書店、2014年、92ページ
- ²⁰ Aharon Appelfeld, *L'héritage nu*, trad. de l'anglais par Michel Gribinski, Olivier, 2006, pp.49-50
- ²¹ Claude Mouchard, *Qui si je criais... ?*, Laurence Teper, 2007, p.78
- ²² たとえば、ダン・ストーンは、「ホロコーストは、人権について何も教えない」と述べている（『ホロコースト・スタディーズ』武井彩佳訳、白水社、2012年、285ページ）。
- ²³ この文脈ではまず、「そう、言語は、そうだ、何があるかと、失われずに残る。しかしそれは今や、自分自身の答えの不在を通り抜け、恐るべき無言を通り抜け、死を担う言葉の幾千もの闇を通り抜けねばならなかった」という、パウル・ツェランのプレーメン文学賞受賞講演での言葉が想起されるが、

本論では取り上げない。

- ²⁴ Lettre de Robert Antelme à Dionys Mascolo, in *Autour d'un effort de mémoire*, Maurice Nadeau, 1987, p.14
- ²⁵ Saul Friedländer, *Quand vient le souvenir...*, Seuil, coll. Points, 1978, p.83
- ²⁶ オトー・ドフ・クルカ『死の都の風景』壁谷さくら訳, 白水社, 2014年, 45ページ
- ²⁷ ルート・クリューガー, 前掲書, 133ページ
- ²⁸ Aharon Appelfeld, *op.cit.*, p.69
- ²⁹ ケルテース・イムレ, 前掲書, 93ページ
- ³⁰ Saul Friedländer, *op.cit.*, p.76. なお, 子供の眼差しが細部に向かう点については, 拙論「ヴェルディヴ事件の子供たちとパリの文壇」(日本大学商学部『総合文化研究』第21巻1号)を参照。
- ³¹ 赤十字の視察団に対するカモフラージュの側面もあったテレージエンシュタットから移送されてきた人びとは, アウシュヴィッツ=ビルケナウで家族一体のまま, しばらく収容されていた。
- ³² インゲ・ドイチュクロン『アウシュヴィッツの子供たち』岩淵達治訳, 河出書房, 1965年, 73ページ
- ³³ Pierre Pachet, *Aux aguets*, Maurice Nadeau, 2002, p.8
- ³⁴ Catherine Coquio, *La littérature en suspens*, L'arachnéen, 2015, p.474
- ³⁵ Pierre Pachet, *op.cit.*, p.9
- ³⁶ Aharon Appelfeld, *op.cit.*, p.41
- ³⁷ *Ibid.*, p.67
- ³⁸ Saul Friedländer, *op.cit.*, p.105
- ³⁹ *Ibid.*, p.108
- ⁴⁰ Catherine Coquio, *op.cit.*, pp.482-483. 強調は原文。
- ⁴¹ ジョルジョ・アガンベン『幼年期と歴史』上村忠雄訳, 岩波書店, 2007年, 89ページ。強調は原文。
- ⁴² ただし, アガンベンの収容所論には首肯できない部分も多々あることは付言しておきたい。それはとりわけ, 「回教徒 [ムーゼルマン]」と呼ばれた人びとを収容所の代表的存在だとして, 収容所を「語りえないもの」と見なしてしまう点である。「語りえない」のではなく, 「語り尽くせない」のではないか。「経験」と呼ばれるものが, ラングとパロールの間に存するものだとするならば, そしてインファンズがつねにすでに言語活動を裏打ちするものであるならば, なおのこと, それは語りえないのではなく, 語り尽くせないものだと考えられる。
- ⁴³ Robert Antelme, *L'espèce humaine*, Gallimard, coll. Tel, 1957, p.15. 強調は安原。
- ⁴⁴ Robert Antelme, Lettre à Mascolo, *op.cit.*, p.15
- ⁴⁵ Maurice Blanchot, *L'espace littéraire*, Gallimard, 1955, coll. Folio-Essais, p.21
- ⁴⁶ プリーモ・レーヴィ『休戦』竹山博英訳, 岩波文庫, 32-35ページ

Résumé « La langue des enfants de la Shoah »

Si la littérature contemporaine n'a plus un sens identique à celui d'avant la Shoah, c'est que le langage est mis en cause une fois pour toutes dans les camps de concentration et d'extermination qui ne sont rien d'autre que la tentative d'annihiler la possibilité même du

témoignage. La littérature après Auschwitz est alors obligée de se poser une question concernant sa propre raison d'être : comment résonner les paroles des assassinés ? Ce processus de transformation de la langue se trouve notamment dans les souvenirs d'enfants survivants, car pour ces enfants, à commencer par Aharon Appelfeld ou Saul Friedländer, coïncident souvent l'acquisition du langage et l'initiation à la vie sous la menace permanente de la mort : ils apprennent une langue non seulement pour vivre, mais pour survivre, et par ailleurs pour témoigner. Dès lors que ces enfants qui atteignent l'âge de raison à cette époque ont une enfance sous la persécution, le caractère de leur écriture peut sembler inouï aux yeux des adultes capables de se souvenir du monde de l'avant-guerre. Les témoignages des enfants survivants de la Shoah se composent ainsi de mots incluant, dès le début et à jamais, la peur de la disparition.